

活動分野	森に親しむ講座		
タイトル	能登のタブノキと折口信夫		
実施日時	平成30年9月19日(水) 9時30分~11時30分		
実施場所	千葉市文化センター		
受講者	46名	F I C会員	12名

活動の内容

1. 暖地性のタブノキは、地球温暖化の波にあおられ、南国からその勢力を日本列島へと広がりを見せ、日本海側最大の能登半島の沿岸部から内陸低地部にかけて、広く自生していた。縄文末期には稲作栽培が始まるとともに伐採されてきたが、神宿るタブノキを伐れば罰が当たるというタブー（禁忌）意識が自然に働き、能登人の信仰心の篤さがタブノキを残した。
2. タブノキが古より神聖化され、能登ではそのものを信仰の対象にしたり、地元の祭礼においてその霊威がいかに発揮されている。毎年8月、七尾市、中能登町の諏訪系三神社では、風祭りの鎌打ち神事がおこなわれる。稔の秋を前に風神を祀って、神木のタブノキに二丁の左鎌を打ち込んで、風や雷の被害を封じ豊穰豊漁を祈願するという神事である。
3. 国文学者・折口信夫は、国学院大学、慶応大学で教壇に立ち、しかも歌人（釈超空）でもあった。民俗学の泰斗・柳田国男との出会いで民俗学への関心が深まり、その研究では芸能分野が一任された。折口は古代への憧憬から、古代のままの面影を残すタブノキに思いを馳せ、その志は民俗学・国学の未来をタブに託したといわれる。折口の民俗学は広範な研究から「折口学」と称される。
4. 昭和2年、折口は能登をめぐる民俗探訪で、羽咋市の気多大社を訪れた。社殿背後にはタブノキなどの照葉樹が繁り、古代の森をそのまま残す「入らずの森」が見えた。古代研究に情熱を傾けた折口の感性を大きく揺さぶった。大社の近くの渚に立って、祖先たちが南の国から海流に乗って渡来したのは、タブノキの森に近い海岸で、そこを新天地にしたという構想をイメージした。
5. 折口の独特な学問を説明する名彙に「マレビト」と「常世（とこよ）」がある。マレビトは、古代の村々に定期に来訪して人々を幸福にして還る来訪神をいう。常世は、マレビトのふるさとである理想郷で、海の彼方において人々を悪霊から護ってくれる祖先（魂）が住むという。タブノキは、海の彼方から漂流した祖先たちの、魂の「寄り辺」とみた。
6. 折口は、南信州の芸能神事から、人にして神なる姿で来訪する祭りをみて、「マレビト」来訪を実感する。仮面仮装なる神が出現し、湯立で湯を浴びて、人々の衰えた魂を蘇生させる祭事である。神を招き、災いを鎮める祭りの所作や言葉が芸術・文学の母体となることを知った。



鎌打ち神事



入らずの森



湯立神事